

平成31年度 体育部会研究計画

1 研究主題

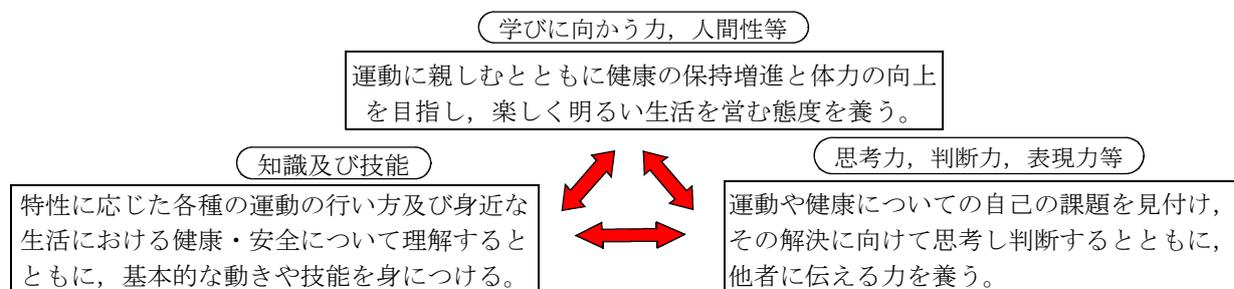
豊かな学びが 子供の未来をつくる 徳島の体育
—運動のおもしろい世界でこだわりをもって課題追求し続ける子供—

2 主題設定の理由

これからの社会は AI による機械化や、多様な人々と関わり競争する国際化により、激しく変化していくと考えられる。このような未来を渡り歩き、幸福で自らに価値を感じながら生活していくためには、自ら考え行動する力が必要不可欠となる。そしてこの力を育成するために学習指導要領において「生きて働く知識及び技能」「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力等」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性等」の3つの柱が位置づけられ、これらに関連づけて高めていく重要性が叫ばれている。

では、これらの考えを受けて体育科ではどのような子供の育成をはかればよいのだろうか。昨年度より体育科における3つの柱（下図）を関連させながら、生涯にわたって運動に好意的に関わり、自ら学びを紡いでいける子供の育成を目指し「豊かな学びが 子供の未来をつくる 徳島の体育」を主題として研究を進めてきた。徳島の体育がこれまで培ってきた子供ありきの学習を大切にしながら、全ての子供が課題追求に向かう授業づくりに取り組んだ。自ら課題に気付き、思考し仲間と関わりながら課題解決することに価値を感じられるような「豊かな学び」を通して、よりよい子供の未来を徳島の先生方でつくっていくことを目指し歩んできた。

この考えは引き続き大切にしていかなければならないものであり、中・四国体育科教育研究大会徳島大会にむけても継続研究していくべき内容である。よって今年度も「豊かな学びが 子供の未来をつくる 徳島の体育」を主題に据え、研究を推し進めることとする。



3 副主題設定の理由

今年度は「運動のおもしろい世界でこだわりをもって課題追求し続ける子供」を副主題として研究を進めていく。運動のおもしろい世界とは、競争や達成の楽しさ、体で感じる動きのおもしろさ、運動がもつ本質的なおもしろさなど様々なおもしろさや楽しさが内在する世界である。その様々なおもしろさや楽しさの中で、現在、注目しているのが運動の本質的なおもしろさである。

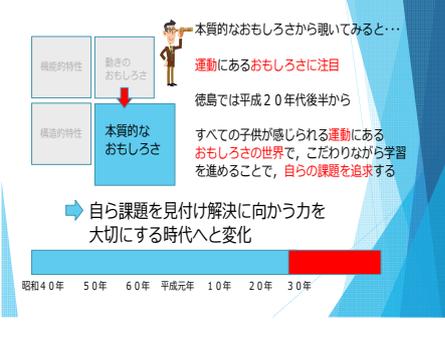
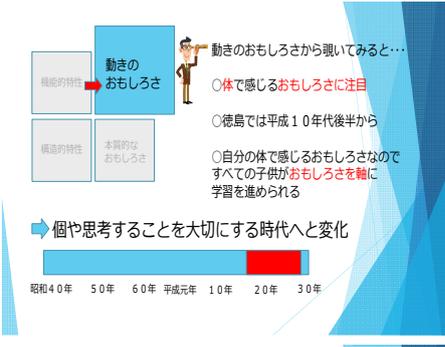
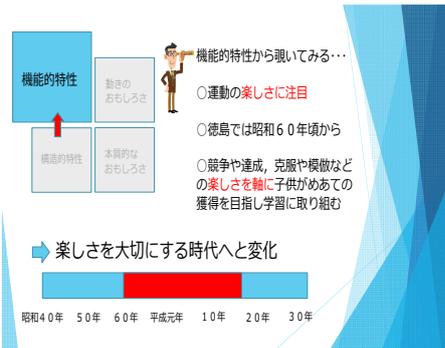
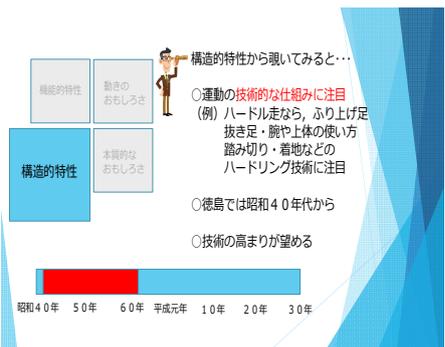
運動の本質的なおもしろさとは、その運動がもっているおもしろさで、運動にふれたときにだれもが夢中になれるおもしろさである。サッカーなら「シュートするかさせないか」バレーボールな

ら「落とすか落とさせないか」である（詳しくは研修部作成の運動の本質的なおもしろさ一覧表を参考）。運動の本質的なおもしろさにふれながら学習を進めていくことで、子供は解決すべき課題に気付き、課題解決に取り組める。そして運動に好意的に関わりながら自らの学びを紡いでいけるのである。

では、なぜ運動の本質的なおもしろさに注目して学習を進めていこうとしているのか。それは、現在の時代背景と大きく関わっている。これまでの徳島が行ってきた体育学習の流れを右図のように表してみた。まず、構造的特性に目を向け技能の獲得に視点をあてた時代があった。そこから、運動の楽しさを大切にす機能的特性に目を向ける時代へと移っていった。さらに時代は個や思考を大切にす時代へと移ったことにより、徳島の体育はそれぞれが体で感じるおもしろさに注目した動きのおもしろさの学習へと変化していった。そして現在、世の中は自ら課題に気付き課題解決に取り組む力を大切にす時代である。徳島の体育も運動の本質的なおもしろさにふれながら、自らの課題に気付き、課題を解決する学習へと変化しているのである。

このような理由で、運動の本質的なおもしろさにふれながら課題解決していく学習を進めていくこととした。ただ、気をつけなければならないこととして、運動の本質的なおもしろさを設定し授業をすれば、自然と全ての子供が自らの課題に気付き、課題解決していけるのかといえそうではないということである。いくら教師が形式的に運動の本質的なおもしろさを設定しふれさせようとしても、そこに子供の「あっそうか」「やってみよう」「どうだろう」「こうしてみたい」などの納得や期待、そして、こだわりがうまれなければ、自ら課題に気付き、課題解決する学習は成り立たない。特にその世界に没頭し、こだわって課題解決に取り組む姿は大切である。ここでいうこだわりとは、学びへのこだわりであり、運動の本質的なおもしろさにふれる中でうまれた自らの課題に対するこだわりである。教師は目の前の子供の実態を見取り、子供の心に寄り添いながら、場の設定や問いを与える。そうすることで、こだわりをもって課題解決に取り組む状況をうみださなければならない。与えた問いや場から課題への気付きや、課題解決に向かうこだわりがうまれなければ、新たな問いや場を与え直すことも必要である。子供がこだわりをもって取り組むからこそ、本当に自分に必要な課題を解決する道が広がり、そして、上手くいかない状況にも前向きに立ち向かい学習を進め続けられる。そして、こだわることの良さに気付くからこそ、他者のこだわりも認められる姿がうまれるのである。

このような考えのもと、全ての子供が運動の本質的なおもしろさにふれながら、こだわりをもって課題解決を繰り返し行えるよう、今年度は「運動のおもしろい世界でこだわりをもって課題追求し続ける子供」を副主題として研究を進めていくこととする。



4 研究内容

○全ての子供がこだわりをもち、学びを紡いでいくための支援

昨年度は子供に与える場の設定や問いなど学習の入り口が研究の中心であった。自ら課題に気付く、解決に取り組む子供の育成を目指し1年間、各都市の先生方と共に研究に取り組んできた。研究の結果、運動の本質的なおもしろさにふれながら、学習に取り組んでいた子供の様子として、

- ・内面の変化（自己中心的な思考から、他者を思いやりかかわろうとする思考へ）
- ・言葉の変化（自らの考えを論理的に伝えたり、仲間に称賛の声をかけたりする子供の増加）
- ・行動の変化（課題解決に意欲的に取り組む子の増加や勝敗のみに意識が向く子の減少）

が見られたとの声があがった。こうした研究の成果があがる一方、

- ・全ての子供が自らの課題に気付くための問いや場の設定の難しさ
- ・こだわりをもって課題追求し続けるための支援

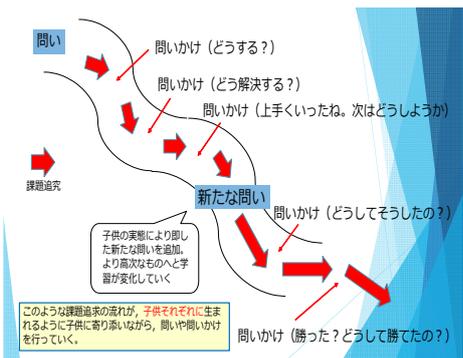
が研究の課題としてあがってきた。

問いや場の設定に関していえば、子供が自ら見付けるべき課題となり得る部分をあらかじめ教師が提示してしまうことで、子供の気付きがうまれなくなってしまったのではないだろうか。ハードル走でいえば「リズムよく」、ボール運動でいえば「相手チームがいない場所に動いて」などがそれにあたる。あらかじめ、教師がリズムよく走ることがいいことだと子供に与えてしまえば、そこから気付きやこだわりはうまれてこない。自らに必要な課題に気付くからこそ、こだわりがうまれ課題解決に取り組むのである。問いや場はあくまで課題に気付くため、課題追求し続けるためにあるものでなければならない。

また問いや場は学年の学びの違いも考えて設定することが大切である。本質的なおもしろさは運動がもつおもしろさで、どの学年の子供も同じように夢中になれるものである。そこで、学年の学びの違いは問いと場の設定でうみだす。子供の実態とそれぞれの学年の学びにあわせ、問いは変わってくる。水泳でいえば、中学年での問いを「スタートからゴールまで浮いて移動しよう」高学年では「スタートからゴールまでスイスイ移動しよう」としたとする。こうすることで、中学年の子供はどうやって浮こうか、どうやって浮いたまま移動しようかと考える。中には伏し浮きで浮いたり、その体勢のまま少しずつ手や足を動かして進もうとする子がいるかもしれない。け伸びのような形で進もうとする子もいるだろう。浮けない子はどうやって浮こうか考え、補助具等を使い浮こうとするかも知れない。このように浮けない子はどうやって浮こうか、浮ける子はどうやって浮いて移動しようかということにこだわり、学習を進める。一方、高学年ではスイスイ移動するとはどういうことか子供なりに考える。そして、スイスイとは「ゆったりと一定の速さであること」「スピードにのっていること」「足をつかないこと」など子供なりに考え、スイスイ移動する方法を見付けようとする。クロールや平泳ぎなど泳法に目を向けたり、息継ぎの獲得に思考を巡らせたり、自らが必要とする技能課題にむけて学びを進めて行く。いかにしてスイスイ泳いでいくかを求めることで、課題がうまれ、課題解決へとつながっていく。このような学年にあわせた問いや場によって、学年の学びの違いをうみ出していくのである。

このような入り口を通り、運動の本質的なおもしろさにふれながら自らの課題に気付いた子供がさらなる学びを追求していくために、教師は子供に関わっていかなければならない。子供の様子を見取り、子供が欲している情報を与えたり、子供の実態にあわせ新たな問いを用意したり、学びが深まるように問いかけをしたりしなければならない。問いかけとは学習が進む中で、その場その場

で子供に投げかける言葉であり、子供が課題に気付いたり、課題解決に取り組んだりする時に投げかけるものである。では、学びの深まる問いかけとはどのようなものか。例えばゲームの中で教師が「勝った？負けた？」と問いかけたなら、子供は「ゲームでは勝ち負けが大切なんだ」と教師の言葉で自らの考えを価値づけてしまう。このままでは子供の中に思考はうまれない。そこで「どうして勝ったの？」「なぜ負けたの？」など、子供の活動に意味をもたせる問いかけをすることで、自らの活動を振り返り、新たな課題を見付け、解決しようとするのである。授業はあくまで学習する子供のものである。教師の価値を押しつけるのではなく、子供が自らの力で学びを進めていけるように、教師は子供に寄り添い、支援していかなければならない。



これまで運動領域に関しては運動のおもしろい世界でこだわりをもって学習が進んでいくことを提案してきた。では保健領域はどうであろう。保健領域に関しても「全ての子供が自らの課題に気付き、課題解決に取り組む」ことは変わらない。健康について考える中で、自分事として課題を捉え、こだわりながら仲間と共に課題解決に取り組むのである。その中で大切にしていきたいこととして、保健領域では「健康に関する本質的な問い」をあげる。本質的な問いとは一つの問いに対して一つの答えが決まっているようなものではなく、健康全体を包括するような様々に答えのあるような問いで、子供がその問いについて、じっくりと考えたりこだわりをもって考えたりするものである。例えば「100歳で同窓会をするにはどのようにすればよいか」などがそれにあたる。子供は100歳まで生きるためにどうすれば良いか考える。100歳まで元気に生きることを阻害するものは何か。保健の見方・考え方を働かせて、自分事としての健康課題に気付く。そして教師の支援を通してこだわりながら課題解決に取り組むことで、自分事として健康と向き合うことができると考える。

このように運動領域においても保健領域においても全ての子供が課題追求し続けていくためには子供に寄り添った支援が必要不可欠である。子供が何を考え、どのようなことを欲し、それをどのように支援していくのか。昨年度の研究よりみられた課題を解決しつつ、運動のおもしろさの世界で課題解決に取り組む子供が、さらなる学びを紡いでいけるように、今年度は「全ての子供がこだわりをもち、学びを紡いでいくための支援」を研究内容として進めていきたい。

5 研究領域と今後の予定

研究領域・研究学年（中・四大会研究領域及び小教研ローテーション表より）

郡市	領域	担当学年	郡市	領域	担当学年
徳島市・名東郡	保健	中高（選択）	板野郡	体づくり（多様な動き） （体の動きを高める）	低中高（選択）
鳴門市	表現	低中高（選択）	名西郡	陸上	低中（選択）
小松島市・勝浦郡	器械	低学年	阿波市	ボール	高学年
阿南市	水泳	低中高（選択）	吉野川市	ゲーム	低中（選択）
那賀郡	陸上	高学年	美馬市・美馬郡	体づくり（体ほぐし）	低中高（選択）
海部郡	器械	中高（選択）	三好市・三好郡	会場郡市代理	

徳島県小学校体育連盟総会 5月24日(金)

徳島県小学校体育指導者講習会 7月26日(金)

中・四国小学校体育研究大会徳島大会及び徳島県小学校体育科教育研究大会 11月15日(金)

6 分科会テーマ

No	分科会名	分科会テーマ
1	体づくり運動 (体ほぐし)	自分の思い通りに身体を操作する中で、自らの課題を追求し、心と体の変化に気付いたり仲間と関わり合ったりする子供の育成
2	器械・器具を 使った運動遊び	身体を操作し、器械・器具とふれあう中で、自らの課題を追求し、回ったり体を支えたり逆さになったりする動きを楽しむ子供の育成
3	走・跳の運動	目的とする場所まで移動したり跳び越えたりする中で、自らの課題を追求し、走ったり跳んだりを楽しむ子供の育成
4	ゲーム	攻防のおもしろさにふれながら、自らの課題を追求し、楽しみながら動きの質を高める子供の育成
5	体づくり運動 (多様・体力)	条件に合わせて身体を思い通り操作する中で、自らの課題を追求し、楽しみながら動きの質を高める子供の育成
6	器械運動	身体を操作し、器械とふれあう中で、自らの課題を追求し、楽しみながら安定した動きの質を高める子供の育成
7	陸上運動	目的とする場所まで移動したり跳び越えたりする中で、自らの課題を追求し、楽しみながら走ったり跳んだりする動きの質を高める子供の育成
8	水泳	水中で浮いたり、スタートからゴールまで移動したりする中で、自らの課題を追求し、楽しみながら泳ぎの質を高める子供の育成
9	ボール運動	攻防のおもしろさにふれながら、自らの課題を追求し、楽しみながら集団としての動きの質を高める子供の育成
10	表現運動	日常にはない時間や空間をみんなで創り出す中で、自らの課題を追求し、楽しみながら踊りの質を高める子供の育成
11	保健	健康について自分事としてとらえる中で、自らの課題を追求し、健康な生活を追い求める子供の育成